

〔書評〕

小林幸夫著『咄・雑談の伝承世界』

母利司朗

小林幸夫著『咄・雑談の伝承世界』は、氏の平成元年四月から平成八年七月にわたる十九編の論文を五つに分け、新たに、この豊かな論文集の格好の手引きとなる序論「咄・雑談論の輪郭」を付し、一冊となしたものである。

副題には「近世説話の成立」とある。しかし、本書は言うまでもなく、いわゆる「近世説話」を真正面から論じようとしたものではない。ここに論じられるのは、『醒醉笑』をはじめとした様々な近世初期編纂の笑話の背景を室町末から近世初期における茶湯の場に定め、そこに繰り広げられた様々な「咄」と「雑談」の場を通して、説話の成立と発展・享受の姿をあきらかにしようとする、刺激的な試みなのである。説話研究の門外漢にとつて、茶湯の大海を泳ぎ、禅林の森に分け入り、笑話の席に興じる著者のしりえは、おぼろげにしか見えない。「近世初期」というキーワードを共有する、ただその一点を抛り所として、誤読を恐れず、私なりの自由な（読み）を示してみることしよう。

「第一編 咄と雑談の諸相」。本書の基本的なスタンスを明らかにする諸論をおさめる。

「第一章 咄と医師―翠竹道三の咄―」において、まず咄の生まれる場、伝承・享受される場はどこなのか、という素朴な疑問を投げかけた著者は、「第二章 茶の湯と雑談―近世軍記への視座―」において、その答えを「（咄の生まれる場所）としての茶湯の一座（64頁）」と自解し、さらに「第三章 咄と振舞―定家俗伝抄―」では、その「（咄の生まれる場所）としての茶湯の一座」を、「振舞」の場と具体化した。これらの考え方は、「この幽斎の頓作咄は、定家掛物を前にしての茶の湯振舞の座から、機知に興じる雑談として生まれてきたのである（80頁）」「定家勅勘説話を（歌徳説話）として享受する場所、それが茶数寄Ⅱ歌数寄の伝統を有する茶湯の一座であった（84頁）」一つの説話が、あるいは歌徳説話として、あるいは狂歌咄として興じられる場所、それが茶湯振舞の一座であった。時に風雅なる歌話として、時に宴の座興なる狂歌咄として仕立てあげられる。それが連歌や俳諧に遊び、

機知の楽しみに興ずる振舞の座の格好の趣向であつた(91頁)などと、繰り返し言を尽くし提示されるが、かようの(茶湯―振舞―咄)という関係式こそ、本書の基本的なスタンスとなるものにほかならない。「第四章 『仁勢物語』と雑談の世界―振舞の座の発想―」は、その関係式を踏まえながら、『仁勢物語』という具体的な作品を「寛永という時代のなかに置いて読む試み」としたものである。著者が見ようとしたものは、『仁勢物語』の背景にひろがる(雑談の世界)の眺望(99頁)である。その行文には、時折思い切った想像の気味が交じるものの、『仁勢物語』は、振舞の座が生んだ俗説『伊勢物語』とさえ言えよう(113頁)という解釈などは、痛快で文句無しにおもしろい。

「第二編 咄の生成と享受」は、第一編で明らかにした咄・雑談の生まれ、享受されていく場を、具体的な作品をもとに、論じようとするものである。その意味で前編第四章は、本編への妙を得た導入役を果たしているといえるであろう。

「第一章 (おどけ者) 一休像の形成」は、『一休の(開悟の貧僧)としての境涯を、むしろ卑俗に解釈して(貧乏僧)としての境涯を強調する』『一休はなし』をはじめとする、近世における一休解釈の一側面(139頁)の意味を探ろうとする試みであるが、著者はその中で、『(おどけ者) 一休の当意即妙の軽口に興じた当代の人々の俳諧(滑稽)精神は、俳諧を「夢幻の戯言」(『阿蘭陀丸二番船』)と観じ、言葉の道化性に興じるることによって、

「すいたこととしてあそぶにはしかじ(同書)」という時代性を表現した(軽口の俳諧)と、その根底において一脈通ずるところがある(101頁)という考えを提示している。本書は実は、著者の寛永俳諧論でもある。そのことについては、後にまた触れる所があるから、ひとまずここでは先を急ぐこととしよう。「第二章

一休(頓作)考―咄の生まれる場所―」もまた、一休を手掛かりに、咄の生まれる場所を論じる。場所の提示は、『一休墨蹟をめぐる数寄雑談が、一休の人物論から逸話にまで及ぶならば、一休に仮託された狂歌(咄)が生まれることもあながち不思議ではない(101頁)』かように茶湯の一座で連歌俳諧が興じられるならば、そこで雑談もまた茶人茶道具の評判、いわゆる数寄雑談にとどまりはしない。機知に富んだ狂歌咄に興じられたりもする。俳諧連歌の秀句咄に遊ばれることもある(103頁)と、ますます精緻になつてやまない。「機知ある言葉遊びに興じる場、それが(咄の生まれる場所)、茶湯振舞の一座であつた(101頁)」という言い方も、著者があきらかにした卓見の一つであろう。「第三章 狂歌咄西行論―茶数寄と歌数寄―」もまた、一休から西行を対象を変えたとはいへ、その趣旨は同じい。「第四章 西行狂歌咄論―歌徳説話と狂歌咄―」は、第三章と同じ西行を仲立としての、「方法としての昔話」を論じたもの。著者には、『京都の伝説―丹波を歩く(福田晃氏と共著 淡光社 平成六年刊)』がある。

「第三編 言葉遊びの世界」は、咄の世界の表現の種々相について論じたものである。

「第一章 夜咄の俳諧―伽と百物語―」は、「咄のなかに表現された滑稽は、俳諧の発想とも通底するものだ。……俳諧の機知に遊ぶ寛いだ咄の場所、夜咄の座の具体相が知りたい」(24頁)という関心から、「享受と創造が機知を媒介として果たされる。夜咄の座とは、昔の俳諧の享受を媒とした、咄の生まれる場所であつた」(22頁)という結論を導き出した好論。「第二章 言葉遊びの文芸―秀句頓作と咄―」「第三章 酔狂する小町―秀句の遊び―」は、「秀句」というそれ自体俳諧論ときわめて密接なつながりを持つキーワードを中心に、咄の生まれる場を支えたものに、「振舞の座の秀句頓作(俳諧性)があつたということ、幾重にも論じる。」「『鸚鵡小町』を踏まえて、『酔狂』する小町像を伝える咄は、『鸚鵡返し』の秀句の俳諧性に支えられていると考えられる。零落の小町を酔っぱらいに〈見立て〉る俳諧性は、その根底のところ秀句の俳諧とつながっている」(24頁)という言い方や、俳諧における「乞食―小町」の付合をめぐる解釈は、まさに氏の面目躍如たるものがある。「第四章 〈はね字〉の遊び―聯句・連歌・咄―」は、俳諧と咄の重層性を説く著者の駄目押しとでもいうべきもの。「漢語を咄の種とした雑談とはいえず、〈はね字〉の遊びもまた、ひとつの俳諧の連歌と言つてよからう」(301頁)という結論には、納得すべきものがある。

「第四編 禅林と咄の世界」。

「第一章 詩話と公案―饅頭の秀句―」は、「饅頭を媒として、禅林と咄の関わりを論じてみたい」(340頁)とするユニークな論。しかし、著者の視点は常に「由緒ただしい淨因饅頭を(ただの饅頭)に落して笑い興じる場所は、本来もう少し限定されるはずだ。……ならばそれは禅林の笑い話と考えるのがふさわしからう。あるいは禅家の列なる茶話の席」(359頁)と、咄の成り立つ場を執拗に語つてやまない。「第二章 靈照女掛絵と孝子譚」は、茶湯の場こそ咄の生まれる場であるとする見方を、饅頭という茶菓子から、床の間に掛けられた掛物へと転じながら、立証したものである。

終編「第五編 咄の編集と出版」は、著者の真面目たる『醒醉笑』論の本編にあたらう。

「第一章 『醒醉笑』の白髪天神説話から―咄の編集へ―」は、「『醒醉笑』と『戲言養気集』(あるいは『きのふはけふの物語』)、いずれも〈遠寺晚鐘〉詩に取材した咄のだが、それではこんな咄の種に笑い興ずる場所、それは想定できるだろうか。やはり、連歌の果てた宴の座興と考えてみてはどうだろうか」(433頁)と論じる。「第二章 咄の編集―『醒醉笑』を中心に―」は、「『醒醉笑』が板倉侯に献呈されたことを前提として、その〈編集〉の意義」(446頁)を論じたもの。「数寄者板倉重宗にしてみれば、『醒醉笑』は社交の場での〈雑談集〉の役割を果たしたとも思われる」(460頁)という指摘は、新鮮である。「第三章 笑話の

出版―連歌・俳諧・咄―」は、「正統的な俳諧史の視点に立つのではなく、《笑話の出版》という視点から眺めれば、寛永という《俳諧の時代》はどのような像を結ぶのか(464頁)」という問題意識を投げかけた、掉尾を飾るにふさわしいスケールの大きな論である。先にも触れたように、本書はある意味で、著者の寛永俳諧論ともいえるものであった。「徳元と重頼」とともに宗祇や心敬の連歌論を借りて、秀句の意義を説くその姿勢において共通すること。これこそが、言葉遊び、すなわち縁語や掛詞の機知的な遊びにすぎなかった俳諧を、言い捨ての座興から文学へと擲いとする方策であった。……そしてそれに応ずるようにして、『犬筑波集』や笑話出版された(464頁)「室町から近世初期の笑話の世界は、貞門俳諧が失った《言葉遊び》に満ちている。それに照らせば、俳諧が自由放埒な笑いを失ったことは明らかとなる。いうならば寛永という《俳諧流行》の時代は、俳諧が《あそび》を捨象していく過程として捉えられよう(483頁)」などという指摘には、当時の俳諧に関心を持つものとして、見逃せない視点が見出だされる。

以上、大急ぎで、本書十九編の概要に簡単な評を付してみた。名古屋周辺に在住する近世文学研究に関心を持つ同学の研究会と共に参加している関係で、著者からはしばしばほとんど定期的ともいえるほどに、本書の母胎となった論文の抜き刷りをいただいている。その意味で、私はすでに以前から氏の論の読者であったはずである。しかし、こうして八年間にわたる論文を一書とした

ものをあらためて読んでみると、そこに一貫して述べられてきた問題意識の大きさにはじめて気付く思いさえする。おそらく私は、今まであまり良い読み手ではなかったたのであるう。

今読み返してみても気付いたことがもう一つある。それは、「茶会記を読む楽しみは、記事の奥から聞こえてくる緩々とした咄の座の笑いさざめきに思いを馳せることであろう」(223頁)「ささやかな謎立とはいえ、談笑の座のくつろぎが思われてとても楽しい」(307頁)「饅頭を話題とした談笑の声が聞こえてくるようだ」(353頁)などの言葉からもうかがえるように、著者の研究を支えている大きな特徴が、研究対象への、おおらかで、手放しの関心である、ということであろう。氏の論文は、その「楽しさ」の分かち合いなのである。研究者の態度には様々なものがあつて当然であるが、小林流の「とても楽しい」という対象への接しかたこそは、様々な立場の違いを越えた共通の認識として、私も常に大事にしたいと思っていることである。

最後に、言わずもがなのこと。著者の問題意識が一貫して変わらないこと、繰り返し幾重にもそれが論じられるということは、その度がすぎた場合、いささか食傷気味にもなってしまうということでもあろう。具体的に指摘する必要はないが、第四編あたりになつてくると、私にもやや満腹感がつものつた。また、最後の貞門俳諧論には、当時の連歌にたいする見方の不十分な点や、単純な事実誤認(たとえば妙満寺雪の会の年時)などが少なからずあ

り、その論に私はかならずしもくみすることができない。しかし、本書に貫ぬかれた問題意識の持つ重たさの前では、このような点など、まさに「毛を吹いて傷を求める」の類にすぎないこと、いうまでもあるまい。

著者によつて、今後豊かで魅力的で楽しい寛永文化論が提示されることを願いつつ、拙い書評を終えたい。

(三弥井書店 平成八年六月 五一頁 一四〇〇〇円)

(もり・しろろ 岐阜大学助教授)